

# 「恋愛と責任」①

\_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_組 \_\_\_\_\_番

氏名 \_\_\_\_\_

—ノ瀬末希 (2006) 『14才の母』 (幻冬舎) より「Case2 佐々木愛理 (仮名・無職・18才)」

## 要約

18歳の佐々木愛理さんは13歳 (中学2年生) のとき、交際していた年上の男性に無理やり性交渉を求められ、妊娠してしまいました。彼女は親や友だちに相談することもできず学校生活を続け、母親に妊娠を気づかれたときには人工妊娠中絶手術を受けられる時期を過ぎていました。彼女の父親に強姦罪で訴えられた彼氏は少年院に入り、彼女は学校を休んで出産の準備をすることになりましたが……。

妊娠や子育てについて知りたいことがあると、私は母に相談した。こんなとき母の存在は心強かった。いままでは悩みがあっても、ひとりで抱え込んでいるだけだった。

でも、いまは違う。困ったことや悩むことがあったら、すべて母が教えてくれた。私はやっぱりまだ子どもなのだ。

母がいてくれたおかげで妊娠・出産に関する不安はあまりなかった。ただ、母親になる心の準備だけはいっこうに整わなかった。

そして、ついに出産。もちろん、子どもが生まれた喜びなんてなかった。ただ痛かったことしか覚えていない。

その後、私は再び学校に通いだした。高校まで卒業するというのが、妊娠が分かってから父と交わした約束だった。育児をしてから登校し、学校が終わったらすぐに帰宅。そして、また育児をするという毎日。学校に行っている間の子どもの世話は母にお願いした。

しかし、そんな暮らしも最初の数カ月だけだった。私は学校が終わっても、すぐには家に帰らないようになっていった。学校の行事を言い訳にして、少しでも遅く帰ろうとした。次第に、子育てがおっくうになっていったのだ。

やはりどこかで子どもの父親が彼だということも心に引っかかっていたのかもしれない。産まれた子どもに対して、愛情が持てなかった。

そして、見かねた両親が子どもを育てるようになった。しかも、私は最近になって、家を出た。

子どもには、ときどき会うこともあるけれど、そんなときは正直言ってどうやって接すればいいのか分からない。自分の子どもだという実感が湧いてこない。子どもには申し訳ないけれど、できればこのまま離れて暮らしたいと思う。やっぱり育てていく自信はないから。

無責任だと非難されても反論はできない。でも、これが私の正直な気持ち。